

薬剤別による服薬モデルの違い

患者が判断する薬の捉え方から検討

○城尾裕子¹・松尾太加志²

(¹北九州市立大学大学院社会システム研究科・²北九州市立大学文学部)

キーワード：患者、服薬、モデル構築

The difference in constructed model of medicine taking between drugs

Hiroko JOO¹, Takashi MATSUO²

(¹Graduate School of Social System Studies, The University of Kitakyushu, ² Faculty of Humanities, The University of Kitakyushu)

Key Words: Patient, Medicine taking, Construction of model

目的

患者は、薬を必ずしも処方箋どおりに飲まず、自分の考えに基づいて服薬をとらえている。城尾(2011)は薬の自己判断による中止が患者の考えるコストとベネフィットからなされていることを検討した。それによると薬剤の種別によって自己判断するかどうか異なり、中止する際の相談者も異なっていた。患者は、薬の効能を自分なりにとらえ、服薬判断のよりどころをどこかに求め、なぜこの薬を飲むのかといった服薬に関する独自の考え方(これを「服薬モデル」と呼ぶ)を構築していると思われる。この服薬モデルは、患者がどのような薬を飲んでいるかによって異なると考えられる。本研究では、患者が使用している薬剤別に、どのような服薬モデルを構築しているのかを検討したい。

方法

調査対象者 総合病院の通院患者(277名)、公共施設などの利用者(111名)、福祉施設・保育所などでの従事者(108名)の496名であった。平均年齢57.6歳(15~94歳)、男性187名(37.7%)女性309名(62.2%)で、2010年10月~12月にかけて実施した。

調査内容 自己式質問紙調査法を用いた。普段どのように薬を使っているのかについて、湯沢(2002)の服薬アセスメントツール12項目および独自に作成した15項目の計27項目を用いた(城尾, 2011)。

結果

服薬中の394名(79.4%)を対象に、服薬している薬剤の種別ごとに各質問項目の回答の割合を算出した(図1)。

高血圧等の薬 薬の効果への期待が高く、自ら薬を使用するよりも、医師の指示で薬の使用する傾向が高い。

糖尿病等の薬 薬の効果の期待は高く、薬剤師の説明も役立つと感じている。医師の指示で薬の使用を決めている患者も比較的多く、薬の依存はよくないと思っている。

症状緩和等の薬 相対的に自分の判断で薬を飲んでいる。効果への期待感は比較的低く、副作用や薬へ依存を気にかける患者が多くみられた。

がん等の薬 薬の効果への期待感は低く、薬剤師からの説明も役立つと感じていない。副作用は気にしているが、依存についてはあまり気にしていない。

狭心症等の薬 高血圧等の薬と同様に、薬の効果の期待が高く、自らすすんで飲むよりは医師の指示で使用する傾向を示した。他の薬剤と比べ、副作用や薬の依存は気にしていないが、薬の種類や数は少ない方がよいと感じている。

うつ病等の薬 副作用を気にし、薬の種類や数は少ない方がよいとする患者が多かった。薬剤師の説明は役立つと感じ、他の薬剤と比べ自らすすんで使用する姿勢がみられた。

考察

高血圧等、糖尿病等、狭心症等の薬においては、薬の効果 expecting 医師の指示に応じて飲むという服薬モデルを構築している。がん等の薬では、効果も期待せず医師や薬剤師の説明よりも自らの選択によって服薬するモデルが構築されている。症状緩和等の薬は、疼痛や便秘等の緩和目的で使用している患者で、ある程度効果を期待しながら症状に応じて自ら選択している服薬モデルとなっている。うつ病等の薬の場合、回答者数が少なかったものの、他の薬とは異なり、自らの選択がもっとも強く、薬剤師の説明によって自分に合う薬を求めている服薬モデルとなっていると考えられる。

本研究において、以上のように服薬している薬剤の種別によって服薬モデルが異なっていることが示されたが、今後個々の患者の服薬モデルについて検討が必要と思われる。

引用文献

城尾裕子(2011). 薬はどのように捉えられているかー患者が判断するコストとベネフィットから検討ー九州心理学会第72回大会発表論文集, 52.

湯沢八江(2002). 通院患者の服薬アセスメント指標の作成と有用性に関する研究 お茶の水医学雑誌 50, 133-143.

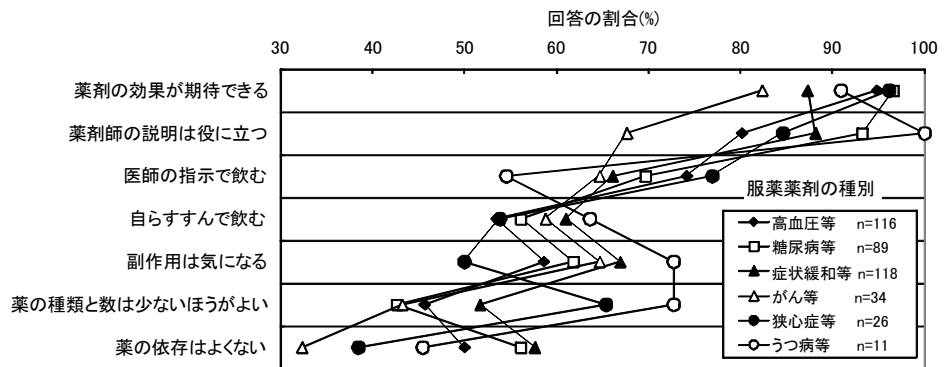


図1 服薬している薬剤別の回答の割合